



博士課程教育リーディングプログラム
免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム

NEWS LETTER



Nurture of Creative Research Leaders
in Immune System
Regulation and Innovative Therapeutics

number **2**
2014 summer



ベーリンガーインゲルハイム 企業イベント参加感想

1期生 分子細胞生物学 森井 真理子
1期生 分子細胞生物学 本田 拓也

2013年11月14日に開催されたBoehringer Ingelheim (BI)Partnering Event Japan に参加してきました。

本イベントは、BI社、ベンチャー企業、ベンチャーキャピタルの業務提携を目的として開催されたものであり、プレゼンテーションや意見交換などが行われました。パネルディスカッションに於いては、ベンチャー企業がどのような開発段階で大手製薬企業と提携することが可能なのか、また、ベンチャー企業の事業計画とベンチャーキャピタルの資本回収計画の間に大きな溝があることなどについて活発な議論が行われました。何れの議題も、大変興味深いテーマであり、新たな視点を養うことができました。

また、懇親会に於いては、BI社をはじめ、ベンチャー企業やベンチャーキャピタルの代表の方々から直接お話を伺うことができ、非常に有意義な経験となりました。

リーディングプログラムフォーラム2013に参加して

1期生 耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学 森本 侑樹

2014年1月10・11日、大阪・ナレッジキャピタル・コングレコンベンションセンターにおいて開催された「博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2013」に出席するとともに、学生フォーラム「ネクストビジョナリー」に参加してきました。今回は、「未知のデバイス」「Sustainability of Resource or Infrastructure」「社会的格差・対立:Health issues」「社会的格差・対立:社会・環境格差の克服」「Japan and/or Global, Now and Future」の5テーマに関して、①提案の独創性(originality)、②野心的であること(ambitiousness)、③提案のインパクト(impact)、④提案の論理性(logicality)、⑤プレゼンテーションの魅力(presentation skills)、の視点から審査(1次、2次、最終審査)が行われました。

私は、現状を打破する新たな発想を求めて、敢えて他大学の学生とチームを結成することにしました。私達のチームは、東京工業大学の辻理絵子さん(電波通信)、東京大学の松平達之さん(体内物質輸送)、東京大学の福里優さん(新規医療デバイス開発)と私(臨床医学)の4名で構成し、様々な分野の人間がそれぞれの専門性を持ち寄って全方位的なアプローチで問題を解決するという意味を込めた“Total Coordinate”という概念の下、頭2文字を取って“TOCO”というチーム名にしました。

私達のチームは、高齢化社会に伴う医療費高騰問題の解決を目指し、無理なく食生活の改善を図ることが可能なシステムを基盤とするベンチャー企業設立を提案しました。具体的には、生活習慣病患者を減らすことで医療費の抑制を図るため、ユーザーに広告表示機能付きの摂取カロリー測定デバイスを24時間装着してもらい、摂取カロリーが適正範囲内ならば、ユーザーに広告収入が還元されることで、ゲーム感覚で食生活に対する意識変革を促すというビジネスモデルです。

今回の経験を通して、他分野の人と協議することの意義、プレゼンテーションで自分の意見を魅せる楽しさを理解することができました。また、長期的目標に対して、その実現性を高めるために今何ができるのか、そして、何をしなければならないかと、いうことを常に考えられるようになりました。



お問い合わせ先



千葉大学医学部リーディング大学院事務室
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻 1-8-1

TEL.043-226-2817
lgs-jimu@chiba-u.jp

News Letter
number 2

■発行日/2014年6月20日

米国国立衛生研究所(NIH)訪問レポート

1期生 免疫発生学 サーカー エムディ ムーシェド ハサン

今回のNIH訪問(2013年10月23日~11月22日)では、William Paul博士の研究グループから、エフェクターT細胞のin vitroおよびin vivoの機能解析の実験技術を習得した。また、彼らのLab meetingに参加することで、T cell biologyの最新情報、およびサイエンスのクエスチョンに対するアプローチの考え方を教わることができた。

一方、NIH Research Festivalに参加し、トランスレーショナルリサーチの現在の動向や最新情報を知ることができた。

また、幸運にも、2013年度のノーベル生理学・医学賞受賞者であるRandy Schekman博士の講演に出席する機会に恵まれた。

この訪問で得た貴重な経験を今後の研究に活かしていきたい。



米国国立衛生研究所

海外短期研修報告(WHO・シャリテ医科大学)

1期生 細胞治療内科学 坂本 憲一

1期生 循環器内科学 岩花 東吾

1期生 分子細胞生物学 本田 拓也

1期生 分子細胞生物学 森井 真理子

WHO研修、そして予防医学集中講義を通じて、自分の専門とする糖尿病や肥満などのNCDs(non-communicable diseases)が、途上国も含め、世界中で非常に重要視されてきている事を改めて実感できた。経済格差も政策も文化も異なる国家に対して、WHOがどのようにNCDsの分野でリーダーシップを取っていくのか、今後も注目していきたい。医学、公衆衛生学、社会学など様々な分野で活躍する研究者達の、世界を視野に入れた予防医学に関する議論に触れることが出来、とても刺激を受けた12日間だった。



WHO前にて

平成26年度選抜者ガイダンス及び 1期生・2期生交流会の開催

平成26年4月11日(金)、「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム」の平成26年度入学者(2期生)に対するガイダンスが、医学部本館2階の大カンファレンスルームにおいて開催された。

このガイダンスは、2期生のほか、リーディング大学院関係教員として、中山教授(プログラムコーディネーター)、斎藤教授(サブプログラムコーディネーター)、三木教授(入試・教務委員長)、村山教授(入試・教務委員)、田村准教授(広報委員長)及びリーディング大学院所属の特任教員が参加して行われた。

中山教授の挨拶の後、合格通知書の配布、コースワークやローテーション演習などの詳細な説明がされた。

ガイダンスに引き続き、1期生と2期生、関係職員の自己紹介と1期生による海外研修の発表会が行われた。

この会は、1期生が森本侑樹君を中心として企画・運営し、平成25年度に実施された研修の中で、坂本 憲一君がシャリテ医科大学での研修、本田 拓也君がWHOでの研修、Sarkar Hasan君がNIHでの研修について、英語で発表した。2期生にとって初日から充実したイベントとなった。



The 3rd Chiba-Uppsala Academia Joint Workshop に参加して

1期生 小児病態学 長澤 耕男

2014年2月20日、21日に千葉大学で開催されたChiba-Uppsala Academia Joint Workshopに参加させていただきました。

そこでは、様々な研究者の様々な話を聞くことができ、とても勉強になりました。また、今回は自分の研究テーマ「小児のRSウイルス感染症と気道細菌叢の関係」について話す機会をいただきました。1歳未満のRSウイルス入院児を対症に抗菌薬使用が細菌叢や宿主の免疫応答にどのような影響を与えるか調べるものです。英語でのプレゼンテーションということであり、うまく内容が伝えられているか不安ではありましたが、「使用する抗菌薬により細菌叢への影響は異なるのではないか」とか「未熟児などの基礎疾患のある児は除外するのか」といった具体的な質問をしていただくことができました。

最後にいただいた質問で「乳児の細菌叢に影響を与えるものは抗菌薬の他に何があるのか」というものに対し、私は食事しかすぐには思いつきませんでした。しかしその後、問いの答えを改めて考えることで、予防接種の有無といった実際の検討に必要な患者背景に気が付くことができました。

今回の発表を通して、英語で自分の考えを伝えることの難さを改めて認識しました。また、

一方で多くの質問をしていただき、著名な先生方に自分の発表が興味を持ってもらえたことはとても励みになりました。





曾根原 弘樹

<所属>
生殖医学

●研究内容

卵巣胚細胞腫瘍の発生機序に関する分子遺伝学的解析

●目標

産婦人科領域の臨床能力を身に着けるとともに、来るべき1000ドログenom時代によってもたらされる、オーダーメイド医療や新しい治療概念に対応した幅広い知識を習得する。

●一言

ご活躍されている様々な先生方から学ぶことができる素晴らしい機会をいただき、良い成果として還元できるように頑張りたいと思います。



山本 健

<所属>
小児病態学

●研究内容

食物アレルギー患者の末梢血T細胞と好塩基球の補体レセプターの発現と変化

●目標

小児のアレルギー疾患分野は多くの患者さんを抱えています。トランスレーショナルリサーチは数少ないのが現状です。その打破を目指しています。

●一言

LGSで学んだ事を糧に世界と狭しと活躍し、日本の小児医療の発展に貢献します。



駒井 絵里

<所属>
細胞治療内科学

●研究内容

慢性炎症におけるp53とGATA3を中心とした細胞内クロストークと転写ネットワークの解明

●目標

LGSをきっかけに多くの人々と交流し、自分の研究テーマを充実させていきたいです。

●一言

初心忘れず、忍耐強く、楽しく！やっぴいこうと思ひます。よろしくお願ひ致します。



山崎 璃沙

<所属>
薬効薬理学

●研究内容

肺線維化の細胞内シグナリング・転写因子機構の解明

●目標

肺線維症に限らず、良い治療ターゲットの発見には疾患に対する基礎研究は不可欠です。臨床につながる質の高い基礎研究ができる研究者になりたいです。

●一言

様々な分野の先生方と一緒に学ぶことができ、とても刺激的です。



井出 真太郎

<所属>
細胞治療内科学

●研究内容

糖尿病合併症における転写因子Tcf21の役割

●目標

血糖管理に比べて糖尿病合併症管理はまだ課題があります。糖尿病腎症の研究と臨床を通じて、世界に影響を与えるPhysician-scientistsを目指します。

●一言

リーディングプログラムは将来の医師としての可能性を広げてくれると思います。



金井 哲也

<所属>
神経内科学

●研究内容

重症筋無力症における免疫治療の再構築

●目標

重症筋無力症において、Tregの機能異常があると多数報告されている。今後EAMGマウスで抗インターロイキン17抗体を利用した治療による急性期発症治療を検討しています。

●一言

リーディング大学院入学後から様々な研究や発想に出会い、有能な同期・先輩に日々刺激を受けています。



策 愛子

<所属>
アレルギー・臨床免疫学

●研究内容

関節リウマチ患者のCXCR4の発現レベルとトシリズマブの薬効予測

●目標

関節リウマチをはじめとした膠原病において個々の患者における効率の良いテーラーメイド治療が可能となるよう、薬効予測に有用なバイオマーカーの発見に努めたい。

●一言

様々な分野の方と交流を持つことができ、日々とても刺激を受けています。この機会を大切にしていきたいと思ひます。



玉地 智英

＜所属＞
先端応用外科学

●研究内容

現在外勤中にて未定ですが、癌細胞の分子生物学的な特徴を研究したいです。

●目標

癌細胞が転移するメカニズムや周辺環境を理解することで、転移を抑制したり、癌細胞に特異的に取り込まれる薬剤輸送システムの開発に寄与できればと思います。

●一言

研究は工学分野で行った経験しかありませんので、皆様のアドバイスを頂ければ幸いです。



Eishika
Dissanayake

＜所属＞
小児病態学

●研究内容

The prevalence of childhood allergic diseases is on the rise. There is increasing evidence that environmental factors exposed to during pregnancy and the early neonatal period deeply influence the susceptibility to allergic diseases.

●目標

To understand how environmental factors including the maternal cytokine milieu, intestinal microbiota and immunoactive substances in breast milk affect the development of allergic diseases.

●一言

This study will contribute to the understanding of the origins of allergic diseases and thus their possible prevention.



中川 誠太郎

＜所属＞
皮膚科学

●研究内容

ANCA陽性血管炎と陰性血管炎と好中球のNETsの関係。

●目標

好中球は細菌などの病原微生物に遭遇すると、自己のDNA、ヒストンを含んだNETsという複合体を細胞外に放出し殺菌作用を発揮する。近年、自己免疫疾患の発症にNETsが関連しているという報告がある。好中球の細胞質に対する自己抗体の存在が知られるANCA関連血管炎の発症にもNETsが関係している可能性が高いと考えられる。ANCA陽性の血管炎と陰性の血管炎の間でNETsにどのような差異があるのか解析する。

●一言

やりたいことがたくさんありますが、LGSという非常に恵まれた環境を与えていただいたので、この機会を存分に生かして臨床に還元できる研究を行っていきたくと考えています。



三田 恭義

＜所属＞
耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学

●研究内容

アレルギー疾患に対する新規治療法の開発。

●目標

現在は遠く福島で耳鼻科の臨床に携わっています。こちらでの経験を今後の研究活動の糧にできればと考えています。

●一言

このプログラムを通じ、多分野・多領域・多国籍の皆さんと切磋琢磨しあい、日本、ひいては世界をリードするような研究を発信して行けるよう、精いっぱい頑張っていきたいと思っています。



李 恵子

＜所属＞
放射線治療学

●研究内容

高LET放射線を用いた先進的がん放射線治療に関する生物分子メカニズム研究

●目標

がんの局所制御率と転移抑制の視点から患者のQOLを考慮した放射線治療の向上を目的とし、特にまだ制御が十分でない微小癌に対して基礎研究の側から新たな治療法の提言を目指しています。

●一言

高みを目指すには視野を広げる事が重要です。このプログラムの恵まれた環境で貪欲に学び一流を目指したいと思っています



宇津 美秋

＜所属＞
高齢者薬理学

●研究内容

コネキシンのスニチニブの抗がん活性増強に関する薬理学的研究

●目標

細胞間チャンネルを構成しがん抑制因子としても知られるコネキシンがスニチニブの抗がん活性を増強するか検討し、またそのメカニズムを明らかにすることを目標としています。

●一言

このプログラムを通じて臨床的な視点を持って研究を進められるようになりたいと思います。よろしくお願ひ致します。



清良 尚史

＜所属＞
薬効薬理学

●研究内容

ヒト結腸癌細胞におけるEP4受容体発現と低酸素誘導因子-1 α 発現との関連性の解明

●目標

世界を牽引するトップレベルの研究者になりたいです。

●一言

このプログラムでは様々なバックグラウンドを持った方達との交流ができ、また最新の研究成果や研究手技も学べます。このプログラムを通し私は将来世界に必要とされる人材になりたいです。